

地域開発における伝統的緑地（テラジャカン）の役割

—バリ島プンリプラン観光村の事例—

菱山宏輔^{*1}・加藤禎久^{*2}

Roles of Traditional Small Green Space in Local Development in Bali, Indonesia Case Study of a Tourist Village, Penglipuran

HISHIYAMA Kosuke, KATO Sadahisa

要旨：本稿は、インドネシア共和国バリ島の南部地域にみられる伝統的緑地「テラジャカン」に着目し、観光にかかわる地域開発における役割を明らかにするものである。テラジャカンは各家屋敷を囲む壁の外側、道路に面した敷地につくられ、各世帯で管理されながら、その利用は私的なだけでなく公共的でもあるという点で、私的次元と公共的次元の多元性が特徴である。近年、テラジャカンは都市化のなかで失われつつあるが、プンリプラン村の観光地区においてはテラジャカンの一斉植栽を行い、村のシンボルとすることで、観光における新たな取り組みと外貨獲得の機会を生み出すこととなった。本稿はプンリプラン村の目抜き通りに立地する世帯および地域開発の関係者にインタビュー調査を行い、主要なデータとして用いている。

キーワード：テラジャカン, バリ島, 伝統的緑地, 観光, 地域開発

1. はじめに

住宅地にみられる緑地を分類する場合、公園や街路園など公共的に利用しうる緑地と、私的な庭園・庭・敷地とに分けることができる (Sudipto et al. 2012: 352; Wolch J. et al. 2014)。公私両者の中間的な形態としては、共同利用・管理が行われるコミュニティガーデンが存在する (Guitart et al. 2012)。それらを「管理」と「利用」に着目して区分すると、多くの公園は公的に、国や地方自治体によって管理され、公的・共同的・私的な利用が可能である。個人邸庭園の管理・利用は私的なものである¹⁾。コミュニティガーデンは共同的に管理され、利用は共同的、場合によっては私的な利用も可能である²⁾。いずれにおいても多くの場合、「管理」の規模と「利用」の規模は重なるか、管理が利用を包摂している。

これらと比較して、本稿にて対象とするインドネシア・バリ島の伝統的緑地「テラジャカン」についていえば、その管理（および所有）は各世帯によるものであり、この点は上述個人邸庭園と同様である。しかしながら、その利用は私的なだけでなく、近隣住民、場合によっては通り過ぎる人びとに開かれている。ここでは、「管理」と「利用」の範囲が逆転しているのである。

同様に、テラジャカンとコミュニティガーデンを比較すると、次のような特徴をあげることができる。テラジャカンはあくまで各世帯による管理のため、コミュニティガーデンほど直接的な集合性や共同性をもつわけではない。コミュニティガーデンはアクセスをその「コミュニティ」の外部に保証するものではなく、主要な道路に面したり人目につくような場所にあるとも限らない。その一方でテラジャカンは、物的構造として街路に直接面しており、通行者の視界に入り、誰しものが利用・アクセス可能である。

さらに、植生に関して言えば、個人邸庭園の場合、経済的状况のみならず、その家庭ごとの慣習や文化、伝統によってどのような植物が植えられるのかが決定される (Birol et al. 2005)。他方で、コミュニティガーデンは、その造成・運営に関わるコミュニティがおかれている、経済・社会・文化的文脈の影響をうける (Guitart et al. 2012: 369)。テラジャカンはこの両者の特徴を有する。個人の趣味趣向や社会経済状況が反映されながらも、街路や地区全体の社会・文化的な影響をうける。例えば、テラジャカンの植生には、「今は経済的な余裕が無いので一年草を植える余力は無いが、バリ島のシンボルであるプルメリアは植えるべきだ」というような規範意識が介在することになる。テラジャカンは以上のように、私的次元と公共的次元の両者にまたがる、多元的な特徴をもつものであるといえる。

テラジャカンは主にバリ島南部の集落において造成さ

* 1 専修大学人間科学部教授

* 2 岡山大学グローバル人材育成院准教授

れ、日常風景の一部をなしてきたが、現在、急激な都市化のなかで減少するか、あるいはその役割を変容させている（菱山 2012: 230-234; Ida Bagus Brata 2014）。今後なお広域化すると予想される都市・地域開発のなかで、都市の緑をいかに維持・管理していくかは喫緊の問題となる。そのため、本稿では、テラジャカンを地域開発において活用している事例をとりあげ、その特徴を明らかにしたい。

2. 先行研究と本稿の位置付け

テラジャカンとは、バリ島の伝統的な家屋を囲う壁と道路との間に設けられた緑地（前庭）のことである（写真1）。テラジャカンはバリ島の伝統的住居におけるオープンスペースの要素のひとつであり³⁾、住居が立ち並ぶ環境において不可欠のもの、テラジャカンの景観そのものがバリ島住民のアイデンティティのひとつとされてきた（Yudiantini 2012: 179-180）。テラジャカンの物的構造については『アスタ・コサラ・コサリ（Asta Kosala-kosali）』という古文書に記されており、その幅は最小で鶏を入れる籠ひとつ分と家主の足裏の長さひとつ分（約1メートル）、最大では家主が両手を横に広げたときの指先から他方の指先までの長さ（約2.2メートル）である（Dwijendra 2008: 85）。

テラジャカンは、日陰をつくり周囲の温度を下げたり、雨水や屋敷内からの排水を吸収しコントロールしたりする環境的機能をもつ。しかしこの機能だけであれば、街路樹が並ぶ街路園にも通じるものがある。しかしながら、テラジャカンは私的機能と公共的な機能の両面をあわせもっている点で特殊な緑地であり、その伝統的特徴についてはドウィジュンドラ（Dwijendra 2008）の研究に明示されている。

すべてのテラジャカンは、道路に面した各々の家屋敷により独自に設置され、管理されている。テラジャカンは家禽に日光浴をさせる場所、収穫した米や荷物の類を一時的に置いておく場所にもなる（Dwijendra 2008: 82-83）。植えられる植物は民間療法や料理のスパイスとして用いられ、果実は市場で売られたりと多様な用途が想定されてきた。これら私的用途と同時に、次のような諸特徴が公共的な側面を支えている。

テラジャカンには宗教的行事に用いられる椰子の木、ブルメリア、チュンバカといった植物が植えられ、村の祭礼時には、テラジャカンの所有者のみならず近隣住民がそれらを自由に用いることができる。さらに、住人どうしが会話をする場所、旧来であれば馬や馬車といった



写真1 伝統的な特徴を残すテラジャカン
植生に高低差があり、種類が多様である
出典：菱山による撮影（2015年9月）



写真2 都市部の狭隘なテラジャカン
出典：菱山による撮影（2015年9月）

交通手段が停留される場所、朝夕に行商人が荷物を下ろして商売をする場所とされてきた（Dwijendra 2008: 82-83）。以上のように、私的に供給・管理されながらも社会的・公共的な機能をもつテラジャカンは、「社会の相互作用や活動を調整する場所」（Dwijendra 2008: 87）であった。このようにテラジャカンは、私的次元と公共的次元の多元性⁴⁾を特徴とする。

しかしながら現在、テラジャカンは都市化のなかで大きく変容をとげている（写真2）。生活の近代化のなかで、家屋敷をより大きくしたり、自動車用の出入り口を設けたりする過程においてそのスペースが削られるか、残されるとしても商品化され審美的な機能のみが残されるようになった（Ida Bagus Brata 2014）。

デンパサール市の都市計画に関連するバリ州の規定（No.10/1999）においては、伝統的には1メートルから2.2メートル幅とされてきたことに対して、6m幅道路で0.5メートル、18m道路で2メートルの幅までと規定されるようになった（Yudiantini and Jones 2015）。住宅の増加や観光業の活況によるホテルの増加なども、テラ

ジャカンの減少の要因となっている（菱山 2012: 230-234）。テラジャカンについての先行研究は現状限られたものであるが、以上に共通することは、多元性・多様性の衰退・減退について論じられていることである。

そのなかで加藤と菱山ら（Kato and Hishiyama et al. 2017）は都市周辺部のテラジャカンをあげ、市場化と私化のなかで機能的に変容しながらもテラジャカンが維持されている事例について論じている。これは、テラジャカンの維持・再生の可能性という点で新しい観点を提供しているが、研究対象は各家屋敷単位での独自の動きであるとともに、手法は生態学的なものに限定されている。これに対して本稿は、テラジャカンが地域開発のなかでより積極的かつ集散的に用いられている事例に着目し、インタビュー調査をとおしてその役割と特徴を明らかにする。

3. 研究手法

本稿の研究対象地区であるバンリ県ブンリプラン村⁵⁾は、バリ島にある716のデサ(村)のひとつである(Badan Pusat Statistik Provinsi Bali 2016: 63)。地区開発担当者へのインタビューによれば、2016年1月の時点で慣習村(Desa Adat Penglipuran)の全域は112ヘクタール、人口986人、243世帯を有する。このなかで、76人の家長が慣習村の会議の成員となる。目抜き通り沿いには1から72番まで番号がふられた家屋敷・区画が整然と並び、伝統的な路地景観を残す観光地を形成している。この目抜き通りに沿ってテラジャカンが整備され、地域開発の主要な資源として位置付けられている。これを、ツーリズムに依拠した地域開発におけるテラジャカンの活用事例として位置付け、その特徴を明らかにする。

ブンリプラン村を調査対象地として選択した理由は次の3点を踏まえてのことである。第一に、先行研究との関連である。ブンリプランは、バリ島の文化人類学的研究を牽引してきた山下・鏡味(1995)によってバリの観光開発のフロンティアとして注目された。それゆえ、地域開発におけるテラジャカンの位置付けを通時的な観点から比較的明確にしやすい。

第二に、制度的な側面である。バリ島の観光政策は1991年の州政府令によってひとつの転換を迎え、マス・ツーリズムや大規模開発だけでなく「文化観光」を大きな政策目標とした。そのなかで、ブンリプラン村をはじめタバナン県のジャティルイ、ギアニャル県のスバトゥの三箇所が「総合観光村」に指定された。それぞれの特色は、ジャティルイが棚田、スバトゥは木彫りであること

に比して、ブンリプランは伝統的な村落空間の維持・活用という点で注目を集めた。この点から、ブンリプラン村ではテラジャカンをういた地域開発の事例が見出され、研究対象として適切である。

第三に、地域開発におけるテラジャカンの位置付けが明確であるという点である。ブンリプラン村は、州の公園局が1991年に主催した「屋敷前の溝整備コンテスト」で2位、観光局が1992年に主催した「文化観光地コンテスト」においても2位となっており(山下・鏡味 1995: 104)、観光との関わりという側面においてテラジャカンの位置付けが明確であるため、調査対象として適切である。本稿は以上を踏まえ、ブンリプラン村の地域開発におけるテラジャカンの役割と特徴を、インタビュー調査をもとに明らかにする。

このような調査地設定および研究目的にあわせて、以下のような調査設計を行った。調査においては、30分から1時間のインタビュー調査を行った。インタビュー調査は、2016年5月から2018年8月まで、ブンリプラン慣習村長、クブ行政町長、目抜き通りのテラジャカンを利用した新しいプロジェクトの担当者、テラジャカンを所有する各家庭の家長(16人)を対象として行われた。

インタビュー対象のサンプリングとしては、後述するバリ・ムラ文化、筆者らの目視による観光客の流動性、インタビュー過程において明らかとなった南北方向の空間的特徴とテラジャカンの差異を鑑み、エリアサンプリングを行った。具体的には、目抜き通りを上部(北側: テラジャカンは広く観光客が多い)・中部(目抜き通りへの入り口付近)・下部(南側: テラジャカンは狭く観光客は少ない)の3区画に分類した。そのうえで、それぞれの区画においてランダムサンプリングを行った。

村長・町長・プロジェクト担当者に対しては、ブンリプラン村のテラジャカンの整備状況を通史的に把握することを目的として、先行研究に示されている社会・文化的なイベントを軸として半構造化インタビューを行った。各家長に対しては、テラジャカンの管理・利用状況、テラジャカンとツーリズムの結びつき、テラジャカンの開発についての評価に関して、半構造化したインタビューを行った。

4. 調査結果

(1) ブンリプランの歴史

ブンリプラン村はデンバサル市中心部から北東におよそ35kmの中山間地に位置し、目抜き通り沿いにバリ島の伝統的な家並が維持される観光地区である(写真



写真3 プンリプラン村の目抜き通り
出典：菱山による撮影（2015年9月）

3)。プンリプラン (Penglipuran) 村の名前の語源は「リプール (lipur)」という言葉である (Dwijendra 2009: 91)。「リプール」は「心を活気づける」ということを意味し、「プンリプラン」は「心を活気づける場所」という意味となる。あわせて、プンリプランという名前には、「プンリン・プラ (pengeling pura)」という言葉が含まれており、先祖を記憶するための聖なる場所という意味をもつ。この意味は、かつて、ギアニャル王国の侵略に対して、バンリ王国の王から援助の依頼があり、それに協力してギアニャル王国を退けたという歴史にもとづく (Dwijendra 2009: 92)。バンリ王国の王は、協力した人びとに土地を与え、その場所がプンリプラン村となった。そこで生活する人びとの文化は、特に、バリ・ムラ (Bali Mula) と呼ばれるバリ独自の起源をもつ文化の影響を強くうけており、マジャパヒト王国からの移民によってつくられたバリ島南部の文化と区別されている。

その特徴として、人と自然環境のバランスを保つということに主眼が置かれ、建造物の構造にその影響をみてとることができる。とはいえ、1930年代以降、宗教的リーダーの統率により、周辺の村と同様の寺の構造が採用されたり、その後、政府の指導によりバンリ王国の英雄が眠る墓地が設置されたりするなかで、近代的な生活文化も広まっていった (Dwijendra 2009: 92-93)。

バリ・ムラの文化の影響のひとつは、村の地理的構造にみることができる (Dwijendra 2009: 97-101)。村の中央には南北方向に一本の道がとおり、北は高度が高く山の方角 (kaja/ulu)、南は高度が低く海の方角 (kelod/teben) となる。道の北端には寺があり、中央部分に住宅地区、南端にはもうひとつの寺が設置され、それぞれの部分が頭・身体・足、あるいは誕生・成長・死、さらにブラフマナ・ヴィシュヌ・シヴァという三神を意味する。

中央部分の住宅地区に位置する各住宅は、山と海によって結ばれる南北方向に直行するように、東西 (kangkang) に細長くつくられている。この南北に貫く目抜き通りに面した76軒それぞれの家主とその家族は、村の正式な成員とされる。それ以外の地区に住む付属的な成員とは異なり、例えば、寺院の役職につくことができ、火葬を行う際により多くの提供物が求められる等の義務・役割をもつ (山下・鏡味 1995: 103)。この目抜き通りがプンリプランの観光村としての景観をかたちづくり、地域開発の舞台となってきた。

(2) 地域開発におけるテラジャカンの設置

プンリプランの観光村への転換および目抜き通り沿いのテラジャカンの整備は、1991年に遡る。当時、インドネシアの総選挙をうけてスハルト大統領が村を訪れるということで、村びとは自前で目抜き通りとそこに面した屋敷の門を整備し、通りは石畳となった (山下・鏡味 1995: 104)。大統領の訪問はかなわなかったが、これをひとつの契機としてプンリプラン村は政府観光局の「総合観光村」に選出された (山下・鏡味 1995: 106)。

筆者らのインタビューによれば、このときに整備されたテラジャカンは、現在の審美的な特徴を目的とするものとは異なり、壁と水路の間に空間をとり、壁が水流に侵食されないようにするためのものであった。次いで、そこに地元の宗教儀礼において利用するための草花が植えられていったという。

当時のプンリプランにおいては、「伝統的な村」がうりものであった。そこで観光客は「村のなかを歩き、『伝統的な』バリの村の整然としたたたずまいを味わい、チャンスがあれば、村びとの案内で民家をおとずれ、村びとと交流しつつ、独特の慣習に耳を傾ける」 (山下・鏡味 1995: 106) ことを楽しんでいた。このとき、村の主たる収益源は、入村料および駐車料のチケットであったが、その収益を村の発展とどのように結びつけていくのかについては、なお不明確であった (山下・鏡味 1995: 107)。

その後、観光に資するという目的からテラジャカンに観葉植物が植えられた。テラジャカンは伝統村のアイデンティティを成すとともに、観光客の目を楽しませる要素のひとつとなっていった。伝統的な景観の維持・保存、テラジャカンの整備などの結果、プンリプラン村は1995年に、インドネシアにおいて優れた環境保全を行っている個人・組織に送られるカルパタル (Kalpataru) 賞を国から授与されるまでとなった。

（3）テラジャカンをめぐる新たな取り組み

同時に、各家の独自の取り組みもみられるようになった。例えば、観光客を敷地内に招き入れ伝統建築様式についての説明を行った後、用意した土産物や飲食物を購入してもらうという方法である。ここで売り上げを増すためには、観光客に自分の家を訪れてもらうということが必要となる。しかしながら通りからは、目線を遮る壁と門が連なる同じような家の集合にみえ、個別の家の特徴を見出すことが難しい可能性がある。観光客は目抜き通りの上方から通りを見通すことで満足し、その場を立ち去ってしまうこともある⁶⁾。このように、ブンリプラン村では各家が伝統的なつくりを残し、地区全体としての調和をとることができているがゆえに、観光客に個別の家を訪問してもらうよう積極的に動機付けることが難しいという側面をもちあわせた。

入村料と駐車料だけでなく、各家に観光客を呼び込むことを目的としつつ、伝統的な家屋敷の構造と景観を維持しようとする場合、一方ではテラジャカンの個別化が志向されることになった。各家は、観光客に足をとめてもらうよう、独自に、テラジャカンに様々な観葉植物を植えるようになった。しかし他方で、家の前のテラジャカンが必ずしも十分な幅を持たないような場合、壁沿いに土産物を並べたり、垂れ幕を出したりして観光客を呼び込むという、景観を損なうことになるような試みが現れた。そのひとつの例が写真4であり、目抜き通り南側に位置するテラジャカンである。壁が低く、面積は比較的狭小であり、垂れ幕が目を引きく。

近年では、村をあげてテラジャカンを有効活用しているという動きが活発なものとなっている。2015年8月にボゴール市在住の会社経営者の協力を得て、目抜き通り沿いのテラジャカンを対象に観葉植物の一斉配布・植栽が行われ、同年12月にはすべての花が開花した。その



写真4 目抜き通りの南側のテラジャカン
出典：菱山による撮影（2016年5月）

年末、2015年12月25日から2016年1月1日までの8日間にわたり、「ブンリプラン・ヴィレッジ・フェスティバル」と題して3回目（過去に2回実施）となる祭礼が実施され、その内容は花々に囲まれた環境を祝うものとなった。同時に、「ブンリプランに花が咲く」(Penglipuran Berbunga)と題して、村に花が咲き誇り、それが新たな観光と地域開発につながることを祝い、確認する意味がこめられた。2016年4月から5月には2回目となる植栽が試みられ、村は再度花に囲まれた（写真5・6）。



写真5 植栽前（2015年9月10日）
出典：菱山による撮影



写真6 植栽後（2016年8月31日）
出典：菱山による撮影

こうした取り組みを契機として、いくつかの家では地元の植物を使ったジュースの作成・販売・卸売を行うようになった。さらに、テラジャカンに鉢植えを並べて観光客に花や苗を売る世帯、近隣の耕作地にて栽培したキャッサバの粉を使ってドーナツをつくりそれを売る世帯も現れた。このように近年では、単に土産物を並べて売るのではなく、テラジャカンを対象とした植栽のプロジェクトに喚起され、植物を利用し景観に配慮した商品開発や販売の工夫が行われるようになった。

5. 考察

改めて、テラジャカンの特徴として本稿冒頭において論じた「私的次元と公共的次元の多元性」という点から、プンリプラン村の観光開発の事例におけるテラジャカンの役割について考察してみたい。

プンリプラン村では、観光村としての開発のなかでテラジャカンの開発も進み、近年では共同での草花の植栽が行われている。ここに見出されるテラジャカンの新たな役割は、花が咲き誇る村としての景観を生み出すという点で公共性をもつ。同時に、個々の世帯に新たな収入の道を開くという点で私的次元の経済的向上をも含むものである。

もちろん、この場合のテラジャカンの役割は、観光市場との関わりという点で方向付けられたものである。しかしながらそれは、加藤と菱山ら (Kato and Hishiyama et al. 2017)、プラタ (Ida Bagus Brata 2014) が論じるようなテラジャカンの直接的な商品化とは異なるものである。プンリプラン村の事例は、観光客のまなざしを取り入れた景観形成と、それを応用した個別の経済活動の創出 (地元産植物の利用) という特徴をもつ。すなわち、プンリプラン村において造成されたテラジャカンは、ドウィジュンドラ (Dwijendra 2008: 87) が論じるような、「社会の相互作用や活動を調整する場所」としての役割を、地域開発という現代的な文脈においても果たしている。

6. 課題と展望

最後に残る問題として次のような状況をあげることができる。通り沿いの土産物の陳列など、観光資源たる伝統的な景観を壊しかねない試みが散見されること、一部の住民からの不満として、テラジャカンの物理的な広さに違いがあり、テラジャカンが狭いところでは有効活用が難しく、そのことが村落内の格差を生んでいるという意見、花が咲き誇る村というイメージの維持のために、花の植え替えや手入れのための金銭的・時間的負担が増加しているという意見が聞かれることである。テラジャカンをめぐる地域開発が、これらの問題に対してどのように対応できるのかという点については、今後明らかにすべき課題となる。

さらに、テラジャカンの旧来の機能であるコミュニケーションや交通との関係、いっそう日常的な空間利用について社会科学的な枠組みからの分析可能性をあげることができる。コモンズ論においては、管理・利用が公

的・共同的・私的な特徴をゆれうごくような動態が論じられており (宮内 2006)、本稿の事例からもそのような動態を析出し得る。

比較研究・社会貢献の面では、先進諸国の都市緑地の創成、保全に対しても一定の貢献が可能であろう。先進諸国では大規模な緑地化がジェントリフィケーションを生み、社会的隔絶や不平等を生むということが問題となっている (Wolch et al. 2014)。この点においても、テラジャカンのような小規模な伝統的緑地の機能を再評価する意義がある。

参考文献

[注]

- 1) より広域的な影響としては、雨水の浸透による用水確保や地域的な生態系の多様性に貢献している (Gupta et. al. 2012)。近年ではオープンガーデンとして個人邸庭園を外部に解放することで、内と外をつなげる交流の場として機能することで、コミュニティ形成が促進される事例もある (河島・衣川・村田・上山 2015)。
- 2) 秋田ら (2014) は、コミュニティガーデンにフェンス等が設置されていない場合には個人利用もみられること、物理的にオープンになっていることがそのまま公共性を意味するわけではないことについて論じている。他方で、近年ではディベロッパー、NPO、新住民、旧住民など多様な主体が担い手となる事例もみられる (岩瀬・小泉・後藤 2016)。これと比較して後にみるように、テラジャカンは伝統的な形式のなかに公共性を備える都市緑地であるという点で、際立った特徴がある。
- 3) バリ島の伝統的住居には3つの公共空間が備わるとされる (以下、Dwijendra 2008, Yudianti 2012を参照)。ひとつは、本稿にて扱うテラジャカンであり、家屋敷を囲う壁の外側に配置される前庭である。2つめは「ナタ」(natah) と呼ばれ、家屋敷のはほぼ中央に位置する、建物を配置しない空間のことである。ナタは、拡大家族の交流の場所であるとともに、周囲に配置される寝所、台所、儀式を行う場所、家寺、穀物倉庫などの要素の中間領域・過度的領域として、それらの互いの影響を調整する役割を持つ。3つめは「トゥバ」(tuba) と呼ばれる裏庭である。トゥバにはテラジャカンよりも大型の植物や果樹が植えられたり、家畜小屋が建てられ、家畜が放し飼いにされることもある。かつてであれば、有機ゴミはトゥバに捨てられ、肥料や家畜の餌となることもあった。現在では、トゥバに家屋が建てられたり、ゲストハウスになることもある。さらに、複数のトゥバが一挙に開発の対象となり、観光客用のヴィラが造成されている。ヴィラ開発にとって、トゥバは、道から奥まってお

りプライバシーが守られる場所であり、谷に面して眺望も良く、自然環境がそのまま残るため都市部よりも開発

がしやすいというように、三拍子揃った絶好の土地である（ヴィラ開発については、バリ島出身の建築家へのインタビュー（2012. 4. 14）より）。

- 4) バリ島南部には「多元的共同性」と呼ばれる地域社会構成が見出される。その特徴は、「多様な機能の個々別々の集団が、部分的にのみ秩序を保ちつつ集積」（Geertz 1980=1990: 61）していること、「互いに重なり合いながらも一つにはまとまらない協同集団の、複雑に絡み合いながらも高度に構造化された布置関係」（Warren 1993: 8）がみられることにある。「多元的共同性」についてのより詳しい解説と現代的位置付けについては菱山（2017）を参照。
- 5) 同村の観光地区は、近代的・行政的枠組みとしてはクブ町プンリプラン地区となる。慣習的な枠組みでは、プンリプラン村プンリプラン地区となる。このような行政／慣習という地域構成の二重性は、オランダ統治時代のバリ島において、慣習的な村落とは別に行政面を司る機構として、行政的な枠組みが形成されたことに遡る。インドネシア独立以降も、慣習や伝統を担う慣習村（Desa Adat）と、住民登録や徴税など行政を担う行政村／町（Desa Dinas / Kelurahan）の両者が重層的に存在することとなり、時にその枠組みが強化されるかたちで統治に用いられ、現在でも地域社会構造の基盤を成す。ここでは、文化観光がバリ島の慣習面に着目しているとともに、プンリプランが「観光村（Desa Wisata）」として登録されていること、一般的に用いられている呼称を踏まえ、「プンリプラン村」という標記を用いることとする。
- 6) 観光客の行動としてしばしば次のようなものが観察される。目抜き通りと駐車場をつなぐ出入口は通りの中間部分にある。観光客はそこから通りに入り、上方へと歩を進め、そこからの景色を眺め、最上部に位置する寺や竹林を見物する等の後に帰路につくため、目抜き通り下方の人通りは少ない。

[文献]

- 秋田典子・高村学人・宗野隆俊, 2014, 「コミュニティの主体性が発揮される公共空間の生成プロセスの解明—コミュニティガーデン型の土地利用を対象として」『住総研研究論文集』, 41, 205-216.
- Badan Pusat Statistik Provinsi Bali, 2016, *Bali Dalam Angka* 2016, BPS Provinsi Bali.
- Birol E, Bela G, Smale M., 2005, “The role of home gardens in promoting multi-functional agriculture in Hungary”, *Euro-Choices*, 3, 14-21.
- Dwijendra, Ngakan Ketut Acwin, 2008, *Rumah Tradisional Bali*, Udayana University Press.
- , 2009, *Arsitektur & Kebudayaan Bali Kuno*, Udayana University Press.
- Guitart, Daniela, Catherine Pickering, Jason Byrne, 2012, “Past results and future directions in urban community gardens research”, *Urban Forestry & Urban Greening*, 11 (4), 364-373.
- Geertz, Clifford, 1980, *Negara: The Theatre State in Nineteenth-Century Bali*, Princeton University Press (=1990, 小泉潤二訳『ヌガラ—19世紀バリの劇場国家』みすず書房).
- Gupta, Kshama, Pramod Kumar, S. K. Pathan, K.P.Sharma, 2012, “Urban Neighborhood Green Index: A measure of green spaces in urban areas”, *Landscape and Urban Planning*, 105 (3), 325-335.
- 菱山宏輔, 2012, 「ゲートを超えるバリ島のゲートッド・コミュニティ」, 大西仁・吉原直樹監修, 李善姫・中村文子・菱山宏輔編著『移動の時代を生きる—人・権力・コミュニティ』東信堂, 209~247.
- , 2017, 『地域セキュリティの社会学—バリ島の近隣住民組織と多元的共同性』御茶ノ水書房.
- Ida Bagus Brata, 2014, “Commodification of Telajakan at Ubud Village, Gianyar, Bali”, *E-Journal of Cultural Studies*, 7, 1~6.
- 岩瀬貴也・小泉秀樹・後藤智香子, 2016, 「公民連携によるコミュニティガーデンを用いた街区公園の利活用に関する研究」『都市計画論文集』, 51 (3), 277-284.
- Kato, S. and Kosuke Hishiyama, Anak Agung Ketut Darmadi, Dewa Ngurah Suprpta, 2017, “Changing Roles of Traditional Small Urban Green Spaces (Telajakan) in Bali, Indonesia”, *Open Journal of Ecology*, 7, 1-11.
- 河島敬・衣川智久・村田真穂・上山肇, 2015, 「オープンガーデンがコミュニティ形成に与える影響：長野県小布施町を事例として」『日本建築学会関東支部研究報告集』, 85, 429-432.
- 宮内泰介, 2006, 『コモンズをささえるしくみ—レジティマシーの環境社会学』新曜社.
- Perales HR, Brush SB, 2005, “Maize diversity and ethnolinguistic diversity in Chiapas, Mexico”, *Proc Natl Acad Sci*, 102, 949-954.
- Sudipto, Roy, Jason Byrne, Catherine Pickering, 2012, “A systematic quantitative review of urban tree benefits, costs, and assessment methods across cities in different climatic zones”, *Urban Forestry and Urban Greening*, 11 (4), 351-363.
- Warren, Carol, 1993, *Adat and Dinas*, Oxford University Press.
- Wolch, Jennifer R, Jason Byrne, Joshua P. Newell, 2014, “Urban green space, public health, and environmental justice: The challenge of making cities ‘just green enough’”, *Landscape and Urban Planning*, 125, 234-244.
- 山下晋司・鏡味治也, 1995, 「バリ島プンリプラン村観光開発の最前線」, 『季刊民俗学』, 191 (3), 100-107.
- Yudiantini, Ni Made, 2012, “Natah and Telajakan: The Role and Identity in Indigenous Villages”, *Proceedings of International Seminar on Place Making and Identity 2012*, 179-187.
- Yudiantini, Ni Made and David Jones, 2015, “The Role of Tra-

ditional Regulation in the Indigenous Villages for Conservation of Village Pattern”, *Proceedings of 21st International*

Sustainable Development Research Society Conference,
1~10.